プラットフォーム名	生命科学連携推進協議会
研究期間	平成２８年度～平成３３年度
研究支援代表者	今井　浩三 （東京大学　医科学研究所　特任研究員）
研究支援代表者からの報告	（１）プラットフォームの目的及び意義 本生命科学連携推進協議会は、生命科学分野を中心とする支援研究者間の連携、異分野融合や人材育成を一体的に推進することで、我が国の学術研究の更なる発展に資することを目的としています。具体的には、科研費を獲得した研究者を対象として、技術支援・リソース支援等を通じて問題解決への先進的な手法を提供する４プラットフォーム（コホート・生体試料支援プラットフォーム、先端バイオイメージング支援プラットフォーム、先端モデル動物支援プラットフォーム、先進ゲノム解析研究推進プラットフォーム）による支援活動をより充実させるため、プラットフォーム間の連携活動、国内外ネットワーク連携活動を行うほか、支援対象者の利用を促進するための活動として、支援説明会・成果シンポジウム等を開催しています。 また協議会に「社会との接点活動班」を設けて、研究の倫理的・法的・社会的課題に関する相談、講習とともに、各地において国民の皆様への支援活動の広報のため、市民公開シンポジウムを行っています。加えてアウトリーチ活動の更なる充実のため市民公開講演会も別途開催いたしました。 協議会の活動意義は、4 プラットフォームで展開される 75 の支援機能を有する全国の 51 大学・24 研究機関が、密に連携できるように総括班を構成して、機動的で的確な支援体制を築いていることであり、国内外からの情報収集により先端的な支援の質を常に高め、支援を担う若手も育成し、国民に支援活動とその成果を可能な限り説明しようとしている点にあります。
	（２）研究支援活動の進展状況及び成果の概要 毎年春から夏に開催の協議会主催支援説明会・成果シンポジウム・パネルディスカッションには、これまで３回の開催で計 827 名の研究者が出席、支援活動への関心の高さがうかがわれます。パネルディスカッションでは、支援技術の向上、先端技術開発、機器更新の必要性、また支援する側の人材育成や支援業務に携わるための動機付けなどについて、支援者、被支援者の両サイドから具体的な問題提起や提案が出され、活発な議論が展開されました。さらに、将来の利用料徴収等に関するアンケートを、30 年度の説明会や各学会でも実施し、375 名の回答を得ています。 また、生命科学系学会との連携・交流促進として、各プラットフォームとともに、29 年度には生命科学系学会合同年次大会を含め３学会で、30 年度には、日本がん転移学会、日本神経科学大会、日本分子生物学会に出展し、個別に支援内容を紹介したほか、相談対応においても各プラットフォームと連携しました。また今後日本薬学会年会、日本生理学会大会にも出展予定です。 さらに、市民公開シンポジウムについては 28, 29 年度に各 1 回開催し、30 年度には大阪で「AI が変える医学の未来」と題して開催しました。また市民公開講演会としては、30 年度に東大医科研講堂で「認知症とがん治療」について開催しましたが、会場が満席となり皆様から高い関心が寄せられました。 今後の 4 プラットフォームの活動を検討するため、それぞれの委員からなる将来

<table>
<tr><td></td><td>検討部会を開催、学会等で回収したアンケートをもとに問題点を討論、また協議会が対応すべき課題などについて今後の展望を４プラットフォームで共有しました。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">科学研究費補助金審査部会における所見</td><td>Ａ　（連携推進協議会の目的に照らして、期待どおりの進展が認められるため、事業計画のとおり継続を認める）</td></tr>
<tr><td>本協議会は、生命科学研究に関わる先進ゲノム解析研究推進、コホート・生体試料支援、先端モデル動物支援及び先端バイオイメージング支援の四つのプラットフォームを横断的にまとめることで、研究者間の連携、異分野融合や人材育成を一体的に推進し、支援活動を更に充実させ、我が国の学術研究の更なる発展に資することを目的としている。
各プラットフォームの活動をより充実させるため、各プラットフォーム及び国内外ネットワークとの連携活動を行うほか、各プラットフォームの利用を促進するための合同説明会の開催や、公開シンポジウムなどアウトリーチ活動も行っており、高く評価できる。
引き続き、各プラットフォームの特徴を生かしつつ、科研費採択者への支援につなげ、最終的には世界に先駆ける研究支援を可能とする活動となることが望まれる。
今後は、各プラットフォームに対する連携推進協議会のガバナンスを更に強め、アウトリーチ活動、関連学会での展示発表及び若手研究者への研修を実行していくことや、プラットフォーム単独では対応が困難な問題について対応していくことが望まれる。</td></tr>
</table>